

私の保育



矢作 邦子

園庭の続きに雑木林がある。ここは子どもたちが想像性を持って遊ぶのに格好の場である。今日も、亮二、知弘、慎也らが、何やら楽しそうに遊んでいる。見ると、倒れた丸太の小さなフシの穴に棒をさしこみ、手でクルクルとまわっている。

① 「何してるのかな？」

亮二 「火つけるんだよ」

① 「エーッ！」

知弘 「昔はこうやって火おこしたんだよ、ナ」

① 「ヘエーッ！すごいわー」

亮二 「先生もやってみたら？」

① 「でも棒が……。あつた！これでいいかしら？」

子どもたちと同じようにやってみる。

亮二 「先生、火がついたらこの棒につけるんだよ」

① 「エエ……ッ！」クルクルと一所懸命にまわす。時

々棒の先を手のひらにつけてみる。

① 「なかなかつかないわね」

元樹 「陽が当たっているとやるとつくんだよ」

① 「そうなの？ じゃこっちにおひっこししてみよう」 場所を変え、陽の当たっているところに行く。クルクルして、棒の先に手をあててみると、少し熱くなっている。

① 「ほんと！ あったかいわ」

亮二 「どれ、ぼくにやって」

すぐにさめてしまうが、まだ暖かさは残っている。

亮二 「あったかい」

知弘 「ぼくにもやってよ」

① 「ちょっと待ってて、もう一回クルクルするわ」

① 「もう、そろそろいいかしら知ちゃん」

知弘 「あっちい！」

① 「ねえ？」

知弘 「よし、ぼくもやろう」 一層力をこめてクルクルはじめる。

亮二 「先生！ その火でここ燃やすんだ！」

二又になった枝を砂の中にさし、横に棒を渡し、小さなアルマイトの急須をぶら下げてある。下には小枝が薪

代わりにおいてある。

① 「あら、すてきね。何だかキャンプに来たみたい」

亮二 「そうだよ、なあ？」 近くにいた友だちに合づちを求めている。

亮二 「ここに囲むものがあるといいんだよなあ」 一人

言のように言っている。

① は、そんな子どもたちの間をそっと抜け出て、他の子どもたちの様子を見たあと、保育室から夏の間、陽よけに使っていた大きな綿布とおなべと野菜クズを持って、森へ向う。森では相変わらず火おこしが盛大に行なわれている。

① 「亮二くん、これどうかしら？」

亮二 「いいねえ。どうやるの？」

① は布の四隅にヒモをつけ木にしぼりつけ屋根を作る。

亮二 「こっちの方は低くなってるんだよ」

① 「ああそうか。これじゃだめだわ。それじゃ、ここをこうしたら」 木にしぼってあるヒモの位置を下にす

らしてみる。

亮二「うん、それでいいよ。でも屋根はとんがってるんだよ、どうしよう？」

①「そうね。テントはこうなってるわよね」 手で形を示す。

亮二「先生、何かない？」

①「ウーン。そうだわ。いいものがある」

ホールへ行き、運動会で使ったコーナースタンドを持ってくる。

亮二「それどうするの？」

①「ねえ亮二くん。何か長くてしっかりした棒はないかしら？ここに棒さして真中におくと、ほら、亮二くんの言ったみたいなのができないかしら？」

亮二「先生いいこと考えたじゃない？」

①「さあ、棒探しよ。あるといいわね」

亮二「これは？」

①「どうかしら、ちょっとさしてみて？」

亮二「だめだ。短いや」 いくつかの棒を持ってきてみ

るが、どれも寸足らず。

①「こんな大きいのみつけたわよ。でもささるかしらね。うまく入りますように」

スタンドの穴に入れてみる。

亮二「やったあ！」

①「うわーピッター！」

これでどうにかテントらしくなる。

亮二「かっこいい！」

慎也、訓佳がテントをみて加わってくる。

訓佳「何だこれ？」

亮二「キャンプだよ。そうだ！先生電気つけようよ」

①「電気？でもキャンプって電気のないところですねじゃないの？」

亮二「いいの！」

①が困っていると訓佳たちは木に登りはじめ、用意してあったヒモを枝にからませはじめる。①は何も言わず見ている。

訓佳「おい、そのヒモとハサミこっちによこせよ」

亮二「今持っていくよ」　ハサミをズボンのポケットに入れ、木に登ろうとする。

① 「亮二くん。ハサミ、先生が渡してあげるからかして。お尻にささっちゃったら大変よ」

木にヒモをつないでは結び、次の枝を物色している。

慎也「俺にヒモかしてくれよ」

次から次へとヒモは渡され、枝から枝へとはりめぐらされていく。

訓佳「こちら東京電力です。もうすぐ工事は終わります」

黙って笑ってみている①に説明してくれる。

訓佳「おい誰か、このヒモそこにつないでくれ」木の上からテントの頂上にヒモをつなげることを頼む。

亮二「ぼくがやってみようよ」

亮二「よし、これでいいや」満足そうに電線をながめている。

一方、知弘、浩樹、一人、元樹、龍一たちは、火をつけようと、懸命にクルクルやっている。

① 「火はつきましたか？」

浩樹「つかないなあ」

洋平「先がとんがっている方がいいんだよ」

この言葉を聞き、①は保育室からナイフを持ってきて、近くにおちていた棒の先をけずる。

① 「こうなっているといいのかしら？」

洋平「そうだよ」棒を受け取るとクルクルはじめる。

知弘、浩樹をはじめ、まわりにいた子どもたちがけずってほしいと棒を持ってくる。①は順にけずってあげる。女兒はけずってもらった先にマジックで色をぬり、

色えんぴつだと言って持っている。けずるのに一段落し、カマドにおなべをおき、「早く煮えるといいわね」

などとまわりの子と話し合っている。

訓佳「先生ナイフかして、自分でやるから」

① 「いいわよ、気をつけてね」

まわりに人のいない場所を選び、ナイフと木の枝の持ち方、けずり方を教えてあげると一人でけずりはじめる。龍一、美友紀、知弘たちもやりたいと言い、順番を待つことにする。

なかなか火がつかないのにしびれをきらした亮二は

……

亮二「先生、本当に火をつけて煮ようよ」

① 「そうね。本当にお料理したいわね」

はたして、ここで本当に火をつけていいものか、悩んでしまった。ここまできると、「ごっこ」では子どもたちにも物足りない気持ちもわかるが……。園長先生に相談してみる。園長「遊びで火を使うのはまずいわね。本当に食べられるものを作ったらいんじゃない」

① 「やっぱり区別して使わないといけないですよね。」

それじゃ今度、おべんとうの時にごちそうを作ることになります。」

森へ戻ってこの話を伝え、この場はひとまず収まった。降園前、もう一度、皆のいる前でこの話をする。七月に幼稚園の畑で収穫したじゃが芋があるので、メニューは肉じゃがということになった。帰りのスクールバスの中では、子どもたちもこの話で夢中。バスの先生が「ゆき組は今度は何をするのかしら？」と子どもたちの

様子を伝えてくれた。

翌朝——

暁 「先生！持ってきたよ」

① 「何かしら？」

暁 「キャンプするんでしょ。ホラ！」

袋の中味は、人参、さつま芋、ウインナソーセージであつた。

① 「あら！嬉しい！ 暁くん持ってきてくださったの？ ほら、先生も持ってきたの。お肉と玉ねぎと、それから暁くんのはちよつと形の違う人参。あとお砂糖とおしょう油」

隆弘が母親といっしょに来る。

母親「先生、これいるんですか？ 隆弘が持っていくって言ってるんですけど」

① 「あら隆くんも？ 実は昨日、私がお野菜やお肉を持ってくるわと話したんですけど暁くんも持ってきてくれたんです。ありがとうございます。使わせていただき

ます」

亮二「先生おはよう！人參持ってきたよ」

① 「まあ、亮二くんも？ ありがとう。このはっぱはうさぎさんにかけて、この人參、皆でいただきますよ」

訓佳「先生！ 今日やるんでしょ？ 肉ある？」

① 「あるわよ。こんなにいっぱい」

訓佳「すげえ！。俺、肉大好きなんだ！ たくさん食うぞ！」

亮二「先生、早くやろうよ」

集まった野菜、包丁、マナ板、昨日集めておいた木の枝、大きなおなべなどを手分けして持ち、森へ行く。テントをはり、ゴザを敷き、昨日作っておいたカマドのところに準備する。女兒は皆、野菜を切っている。

① 「元樹くん、すみませんけど、そのカマドもうすこし掘っておいて下さいますか？」

元樹「いいよ」

恵子「私たちはお野菜切ってるの。女の方はお野菜切るから、男の方はカマド作るのよ。頑張ってる！」 ハッパを

かける。

① 「アハハ……そうね。それから、男の方薪が足りないかも足りないの、もうすこし集めておいて下さる？」

良和「こんな大きいがあるよ」

① 「そうね、ちょっと大きすぎてカマドに入らないかもしれないわね。そこにノコギリがあるでしょ。それで半分に切っていただけですか？」

男児、三人で切る。ノコギリがよく切れないのか、大奮闘である。

① 「人參が切れたら、玉ねぎも切っておいてね」

雅美「私、玉ねぎやだ！ 涙でるもん」

何とかかんとか、言いながら、どうにか野菜も切り終った。風で砂にまみれてしまった野菜を洗い直し、大きなおなべをカマドにかける。

① 「さあ、火をつけるわよ。あっ、いけない！ 火事になったら大変だわ。バケツにお水くんでおいて下さる？」

伸一「どのバケツ？」

① 「お砂あそびで使うバケツでいいわ。あるだけ全部

にくんで持ってきてね」

宗孝、伸一たちが保育室に走る。七つのバケツに水が入り、カマドのまわりにおく。

① 「さあ、つけましょうね」

慎也 「よく燃えてる」

定治が木の枝をカマドに入れ、抜き出して持って歩こうとしている。

① 「さーくん、それ危いわね。一度火の中に入れてのは出さないのね」

① 「あら、消えそうだわ」火の様子をみる。

慎也 「ぼくがやってあげる」 太い木でカマドの中をガシャガシャかきまわす。

① 「あら、そんなにしたら、もっと消えちゃうわ、そっとやってみてね」

知弘 「まだ煮えないかな」

子どもたちは待ち遠しい。やっとでき上りおいしいにおいが漂ってくる。

① 「それじゃおべんとうにしましょう。今日はここで

しましょうね。真希ちゃんたちがきれいにお掃除してくださったから」

皆、保育室に戻り、おべんとうを持って森に集まる。

① 「大きなお皿にいっぱいあるから皆で上手に分けていただいてね。おいしいからって一人で食べちゃうとあの方の分がいただけないから」五つに分けておいてあげる。

当番 「どうぞ召し上れ」「いただきます」

まさきにごちそうに手が伸びる。Tはお茶をくばりながらお皿をみる。

① 「なくなったからお代わりがあるから言ってね」

① 「亮二くんおいしい？ あらお野菜も食べられるの？えらいわね」

① 「暁くんどうしたの？」元気のない様子。

暁 「訓くんお肉全部たべちゃったから、ぼく食べられなかった」

① 「やだ訓くん。ひとりで食べちゃったの」笑いながら言う。

訓佳「ちがうよ、だから言ってんじゃないかよ、食べよ。おまえ食べよ」

① 「訓くん、おめえじゃないわよ。だいじょうぶ、お代わりたくさん持つてきてあげるわ」 晁も肉を口に、満足できた。

皆、口々に「おいしい」「うまい！」を連発。「又やろうよ」の慎也のことばに、私も「もちろんよ」。楽しいキャンプ風景だった。

△感想▽

子どもの中から出てきた小さな遊びが、次第に輪を広げ、想像性豊かに深まりを持つと同時に、子どもたちひとりひとりが心から楽しめたこの遊びはやはり五歳児らしさが溢れていたのではないかと、自己満足しているところである。三年保育の三年目という、園生活の体験が積み重ねられたのだと思う。又、子どもたち自身もこの三年間に大きな変化を見せている。保育者も共に楽しめる幸せを教えられたキャンプだったように思う。

△子どもについて▽

亮二……この遊びの導火線となった子であるが、これほどまでに夢中になった遊びがあったかと考えさせられる。活発ではあるが、自己主張することがあまりなく、友だちの中でいつも無難に遊んでいることが多い。

訓佳……とかく自分のいいなりに人を動かしてしまふ。まわりの子が思い通りにならないと不機嫌になり、口の強さ、力の強さで圧力をかけ、皆から一目おかれている。反面、ユニークな遊びの発想で他の子どもをひきつける。

晁……積極さに欠け、いつもマイペースで遊びをみつけている。思うことを相手に直接ぶつけることができず①を通して訴えることが多くみられる。訓佳に対しての不満も精一杯の訴えであったと思われる。

(埼玉・木の実幼稚園)